

性交渉の頻度と家事分担が幸福度に及ぼす影響には 相乗・相補効果があるのか

石橋 挙
(専修大学大学院)

性交渉と家事負担は幸福度や夫婦関係の満足度において重要であるが、これまでの研究では、これらの要素が幸福度にどのように影響するかは十分に理解されていない。また、先行研究は主に個人間の分析に焦点を当てており、個人内の変動や観察されていない異質性によるバイアスを考慮していない。そこで、本研究では性交渉の頻度と家事負担の割合が夫婦の幸福度にどのように影響するかを、固定効果モデルを用いて分析する。分析に使用するデータは、2022年に実施された「家族に関する振り返り調査」である。分析方法としては、幸福度を従属変数とし、主な説明変数として性交渉の頻度と家事負担の交互作用項を設定する。分析の結果、女性の場合、性交渉と家事負担割合の主効果は幸福度に正の影響を与えたが、これらの交互作用による影響は、家事負担が半分程度で性交渉を行っている場合に負の効果があることが示された。つまり、性交渉の頻度が多いと幸福度が増す効果は、家事分担が平等な場合では弱まる可能性があり、家事負担と性交渉には相補関係があると考えられる。本研究は、性交渉と家事負担の割合の関連が幸福度に変化をもたらすことを明らかにし、夫婦関係におけるこれらの要素の重要性を強調している。

キーワード：幸福度，性交渉，家事負担，平等化規範，性役割分業

1. イントロダクション

性交渉や家事負担の程度は、夫婦関係を良好にするために重要である。性交渉は、単なる生殖のためだけでなく、人間関係を表すもの (Laumann et al. 2006)である。特に、夫婦間の性交渉は、健全な結婚生活に重要 (Elliott & Umberson 2008)である。実際、夫婦間で性交渉の頻度が多いと、幸福度や夫婦関係満足度を上昇させる (Blanchflower & Oswald 2004)。また、家事負担の割合は、幸福度、夫婦関係満足度、性的満足度、性交渉の頻度に影響を及ぼすことが明らかになっている (Kornrich et al. 2013; Johnson et al. 2016; 佐藤 2020; Carlson et al. 2016; Barrett & Raphael 2017; Harris et al. 2022)。したがって、性交渉と家事負担の程度は、夫婦関係の良し悪しを測る際には重要な要素である。

しかし、これまでの夫婦間の幸福度研究では、夫婦間の関係性において重要である性交渉と家事負担の関連が、どのように影響するのかについては、理解されてこなかった。前述のように、家事頻度によって性交渉の頻度や幸福度が変化すると先行研究が指摘してい

るにもかかわらず、性交渉と幸福度に関する研究ではこのような関連を見落としてきた。例えば、夫婦が同じ程度家事を行うことで、性交渉の頻度や性的満足度、関係満足度が増加すると言われており (Carlson et al. 2016)、これは平等化規範によるものだと言われている (Carlson et al. 2016)。そして、性交渉の頻度が増えれば幸福度も増加する。だとすれば、理想的な家事割合かつ性交渉の頻度が十分であると、相乗効果が生まれ、より幸福を感じるかもしれない。しかし、一方で、どちらかが満たされていれば、幸福度がある程度確保できる、あるいは、差があるからこそ満たされるという相補関係も考えられる。これまでの先行研究では、こうした想定があるにもかかわらず、夫婦間の性交渉と家事負担の割合が幸福度に及ぼす影響を別々に扱ってきたため、実際の夫婦間でなにが起こっているかの理解が十分とは言えない。

さらに、性交渉と幸福度に関する多くの研究 (Blanchflower & Oswald 2004; Kahneman et al. 2004; Wadsworth 2013; Elliott & Umberson 2008) は横断データを用いたものであったし、家事頻度と幸福度に関する研究の多くも横断データを用いていた (Hajek 2019)。横断データを用いた研究の場合、ある個人の観察されない異質性を考慮できない。したがって、横断データの場合、性交渉や家事頻度が幸福度に及ぼす影響には、観察されない異質性による偏りが生じている可能性がある。ただし、数少ない(個人内の)固定効果モデルをもちいた、家事負担割合が性交渉の頻度に及ぼす影響に関する研究 (Hajek 2019) によれば、家事負担の公平さ、実際の家事負担割合は性交渉の頻度とは関連がないことを指摘している。

そこで本研究では、性交渉の頻度と家事負担の割合によって夫婦の幸福度がどのように変化をするのかを、日本の縦断データをもちいて固定効果モデルにて分析する。日本社会は、近年女性の社会進出が進んではいるものの、性役割規範の強い国である。また、性交渉の頻度が低く、性的満足度も低い国である。また、幸福度も先進国内では高くない。このような社会では、性役割規範によって、家事負担割合が規定されている可能性があり、家事負担のアンバランス差が、規範と合致するため、性交渉や幸福度に良い影響を及ぼすかもしれない。一方で、性役割規範から変化しつつあることも事実であるため、平等化規範によって、性交渉による幸福度への影響が増すかもしれない。こうした想定の下、観察されない異質性に着目した固定効果モデルを用いて分析を行う。

2. 先行研究

2.1 理論的背景

性交渉は幸福度に正の影響を及ぼす (Blanchflower & Oswald 2004; Kahneman et al. 2004; Wadsworth 2013; Muise et al. 2016)。幸福研究では、結婚、家族、友人などの人間関係が重要視 (Argyle & Furnham 1983; Diener & Seligman 2002; Grover & Helliwell 2019; Stack & Eshleman 1998) されており、性交渉は、生殖の意味だけでなく人間関係をも表すもの (Laumann et al. 2006) としてとらえられているため幸福研究において重要である。

特に、夫婦間の性交渉は、健全な結婚生活に重要 (Elliott & Umberson 2008) であり、夫婦

の良好な関係を維持するための投資 (Yamamura 2014) とも言える。性交渉の頻度が多いと、精神的満足感にも肉体的満足感にもよい影響を及ぼし (Waite et al. 2001) , 離婚や同棲解消のリスクが下がる (Yabiku & Gager 2009) 。以上を踏まえると、夫婦関係の満足度や幸福について理解するためには、夫婦間の性交渉に焦点をあてることが重要であるといえる。

また、夫婦間における家事負担の割合は、夫婦関係の満足度や幸福度、性交渉の頻度や性的満足度に影響を及ぼす重要な問題であるといわれている。例えば、Becker (1981) は夫婦関係において、夫が働き、妻が家事を行う伝統的性別役割分業が、親密さと性的魅力を最大にすると述べている。実際に、1990年代前半の米国のデータをもちいた Kornrich et al. (2013) は、男性が家事を手伝う割合が多いほど、性交渉の頻度は減るし、性的満足度も低いことを明らかにしている。このことを踏まえると、家事負担を夫婦間で平等に行うことで夫婦仲が保たれ、夫婦間での性的魅力、動機が薄れてしまい、性交渉が幸福度に及ぼす影響は弱まるかもしれない。むしろ、男性は仕事、女性は家事というように分業をすることで、性的魅力が増し、性交渉が幸福度に及ぼす影響は増すかもしれない。あるいは、男性の家事負担の少なさからくる不満感、不幸感を性交渉が補うことを示す可能性がある。¹よって、以下の仮説を立てる。

仮説 1 (相補効果, 性別役割分業): 男性の家事負担が少ない方が、性交渉による幸福度への影響が増加する。

一方で、夫が積極的に家事に参加することや、夫と妻の家事負担の割合がそれぞれ半分程度であると、性交渉の頻度や関係満足度、幸福度が増加することも明らかになっている (Johnson et al. 2016; 佐藤 2020; Carlson et al. 2016; Barrett & Raphael 2017; Harris et al. 2022) 。²これらの結果は、夫が家事労働へ参加することで妻が幸せだと感じ (Amato et al. 2003; Stevens et al. 2005) 性交渉を促進させる可能性があること、妻の家事負担が多いと不公平感が増加し幸福度が低下することを示唆するのかもしれない。そして、家事を平等に負担することで、夫婦仲が保たれ (Carlson et al. 2016) , その状態で行う性交渉は幸福度をより上昇させるかもしれない。よって、以下の仮説を立てる。

仮説 2 (相乗効果, 平等化規範): 家事負担が同じくらいだと性交渉による幸福度への影響が増加する。

2.2 日本のコンテクスト

¹ ただし、Shelton & John (1996)は、夫の家事参加度合いと女性の夫婦関係満足度にあまり関連がないことを指摘している。

² これら研究 (Johnson et al. 2016; 佐藤 2020; Carlson et al. 2016; Barrett & Raphael 2017; Harris et al. 2022) は、Kornrich et al. (2013) の使用したデータよりも新しいデータを用いている。

本研究では、女性の家事の負担割合が多く、性交渉の頻度が少ない日本社会を対象とする。近年、日本では女性の社会進出が増えてはいる (International Labour Organization 2023) もの、性差は大きい (Sechiyama 2013)。また、伝統的に、男性稼ぎ手モデルによって価値づけられている (Tsuya et al. 2005)。これは、東アジア社会の特徴的であり、ヨーロッパ諸国と大きく異なる点である (Raymo et al. 2015)。結婚すると、多くの女性は、大半の家事を引き受ける傾向にあり、それが期待されている (Tsuya et al. 2005)。しかも、共働きは増えてはいる (Kohara 2007) もの、仮に働いていたとしても、女性が家事の大多数を担っている (Tsuya et al. 2005)。³ そのような背景では、夫の家事参加率の増加は、女性の負担を減らし、女性の幸福度や満足度を上昇させるかもしれない。事実、佐藤 (2020)によれば、男性の家事参加率が低いことよりも半分程度参加していることのほうが、女性の幸福度が上昇することが明らかになっている。⁴

Durex (2005)によれば、日本は、年間の性交渉の回数がヨーロッパ諸国等の他国に比べて著しく低い。また、性的満足度も低い (Durex 2005)。これらは、Durex (2005)の調査した42か国の中でも、ほぼ最低ランクであった。加えて、Helliwell et al. (2021)によれば、先進国のなかでは、あまり幸福度が高くない。国外の多くの先行研究 (Blanchflower & Oswald 2004; Kahneman et al. 2004; Wadsworth 2013; Muise et al. 2016; Laumann et al. 2006) や、いくつかの日本社会を対象とした先行研究 (Ishibashi 2021; Yamamura 2014) によれば、性交渉が幸福度をはじめ性的満足度や家庭満足度を上昇させている。このことを踏まえると、もちろん性交渉以外によって幸福度が規定されていることも考えられるが、日本においても、性交渉の頻度が増えれば幸福度は増加すると想定することができる。以上を踏まえると、男性の家事参加率が上昇すれば、性交渉にも影響を及ぼし、性交渉がもつ幸福度を上昇させる効果を増加させるかもしれない。

しかし、一方で、前述のように日本は性別役割規範が根強い社会である。このような規範が根強い社会では、夫が仕事、女性が家事といった規範にあったロールモデルが理想とされ、夫婦間の関係性をうまく取り持つかもしれない。つまり、日本では、Becker (1981) や Kornrich et al. (2013)の指摘した性別役割規範による男女の分業が夫婦同士の親密さや性的魅力を最大化するのかもしれない。このことを踏まえると、男性が家事を手伝わないことによる不満を性交渉が補う、あるいは、性別役割規範によって性交渉が幸福度に及ぼす影響が高める可能性があるかもしれない。

3. データと方法

3.1 データ

使用するデータは、2022年に行われた「家族に関する振り返り調査」である。調査主体

³ ただし、女性のほうが家事の負担が多いというのは、日本だけでなく、価値規範が日本と異なる他の欧米諸国でも同じである (Batalova & Cohen 2002)。

⁴ この研究は固定効果モデルも用いている。

は「大規模回顧調査による家族形成期のパネルデータ分析」プロジェクト（研究代表者は保田時男）である。抽出方法は層化二段無作為抽出であり、調査方法は郵送調査である。調査対象者は34-49歳の男女であり、有効回答は3,327票である（有効回収率43.7%）。このデータは、調査対象者に15歳から現在までの出来事を尋ねており、回顧調査ではあるもののパネルデータの形式になっている。本研究でもちいるのは、欠測値を除いた女性については、パーソンイヤーで $N=15,873$ （個体数は $N=1,173$ ）、男性については、パーソンイヤーで $N=13,029$ （個体数は $N=990$ ）である。ただし、固定効果モデルの場合、個体内で1時点しか持たないケースは除かれるため、女性については、パーソンイヤーで $N=15,845$ （個体数は $N=1,145$ ）、男性については、パーソンイヤーで $N=12,955$ （個体数は $N=959$ ）である。

3.2 変数

従属変数には、4件法で尋ねた幸福度をもちいる。選択肢は、1.とても幸せだった、2.ある程度幸せだった、3.少しは幸せだった、4.幸せではなかった、となっている。これらを連続変数として扱い、数値が高くなるほど幸福度が高くなるように値を逆転させて用いる。

説明変数には、配偶者との性交渉の頻度と配偶者との家事負担割合を用いる。配偶者との性交渉の頻度は4件法で尋ねられている。選択肢は、週一以上、月一以上、それより少ない、まったくなし、となっている。これらをまったくなしを基準カテゴリとしたカテゴリカル変数として用いる。配偶者との家事負担割合は5件法で尋ねられている。選択肢は、自分が9割、7割、4-6割、配偶者が7割、配偶者が9割となっている。これらを、自分が9割を基準カテゴリとしたカテゴリカル変数として用いる。この家事負担の質問における、家事とは、食事の用意、食事のあとかたづけ、買い物、洗濯などすべての家事としており、子育ては明記されていない。

統制変数は、結婚継続年数、本人と配偶者の雇用形態、本人と配偶者の年収（対数変換）、本人の残業時間（カテゴリカル変数、無業を含む）、末子の年齢（カテゴリカル変数、子どもなしを含む）である。

これらすべての変数は、1年ごとに尋ねられている時変変数である。

3.3 分析方法

分析方法は、男女別に分けたうえで、観察されていない時不変の異質性を取り除き、個人内の変動に着目する固定効果モデルをもちいる。従属変数には、4件法で尋ねた幸福度をもちいる。分析モデルは3つあり、モデル1：性交渉の頻度のみ、モデル2：性交渉の頻度と家事分担の割合、モデル3：モデル2に性交渉の頻度と家事分担の割合の交互作用を追加したものである。使用するソフトウェアはStata 18である。使用するコマンドは、`reghdfe`である。また、個体間を固定するためにユニットのIDを、個体内を固定するためにユニットの年齢を固定する。

頑健性の確認として、Double Demeaningの補正をかけた固定効果モデルでも分析する。

Giesselmann and Schmidt-Catran (2022)によれば、時間で変化する変数同士の交互作用項をもちいた交互作用の場合、観察されていないユニット固有の不均一性によって、バイアスが生じる可能性があることを指摘している。このバイアスを補正するためには、各変数を平均化し、その積をさらに平均化するという補正をかけた **Double Demeaning** 固定効果モデルを行う必要がある。ただし、このモデルの場合、基本的に、量的変数が念頭におかれているため、性交渉の頻度と家事負担割合の変数に以下の操作化を行う。性交渉の頻度については、まったくなしを 0, 月一回以下を 6, 月一回以上を 12, 週一回以上を 52 回に変換し量的変数とした。家事負担割合については、自分が 9 割, 7 割負担している場合を 0, 相手が 4-6 割以上負担している場合を 1 とした。これらの交互作用項に補正をかけて分析を行う。Double Demeaning 固定効果モデルについては、Giesselmann and Schmidt-Catran (2022)の appendix にならい、xtreg をもちいて、Double Demeaning 固定効果モデルと Double Demeaning をかけない固定効果モデルを分析し、それらの結果の比較も追記する。

4. 結果

4.1 記述統計

表 1 はすべての変数の記述統計を示す。従属変数である幸福度は、女性 3.21, 男性 3.40 となっている。主な独立変数に関しては、性交渉の頻度については、男女ともに、まったくなしが 17%であった。家事負担割合は、女性の場合、「自分が 9 割おこなっている」が 56%, 「自分が 7 割おこなっている」が 28%と、8 割強の女性が、家事を多く負担している。「およそ半分」と答えたのは、14%であった。一方男性の場合、家事を多く負担しているのは、「自分が 9 割」が 1%, 「自分が 7 割」が 2%とほとんどいない。「およそ半分」と答えたのは、23%であり、女性の 14%に比べると 9 パーセントポイントの差がある。

表 1 記述統計

	女性				男性			
	平均	標準偏差	最小値	最大値	平均	標準偏差	最小値	最大値
幸福度	3.21	0.81	1.00	4.00	3.40	0.72	1.00	4.00
性交渉の頻度								
まったくなし	16.7%	0.37	0.00	1.00	17.3%	0.38	0.00	1.00
それより少ない	21.8%	0.41	0.00	1.00	21.5%	0.41	0.00	1.00
月一以上	37.3%	0.48	0.00	1.00	33.3%	0.47	0.00	1.00
週一以上	24.3%	0.43	0.00	1.00	27.9%	0.45	0.00	1.00
家事負担割合								
自分が 9 割	55.7%	0.50	0.00	1.00	1.3%	0.11	0.00	1.00
自分が 7 割	28.3%	0.45	0.00	1.00	1.9%	0.14	0.00	1.00
4-6 割ずつ	14.3%	0.35	0.00	1.00	22.7%	0.42	0.00	1.00
相手が 7 割	1.4%	0.12	0.00	1.00	37.8%	0.48	0.00	1.00
相手が 9 割	0.4%	0.06	0.00	1.00	36.3%	0.48	0.00	1.00
雇用形態								
正社員・正規職員	34.5%	0.48	0.00	1.00	86.8%	0.34	0.00	1.00
パート・アルバイト	23.0%	0.42	0.00	1.00	0.9%	0.10	0.00	1.00
派遣・契約・嘱託社員	6.3%	0.24	0.00	1.00	2.8%	0.17	0.00	1.00
自営業 (家族従業者含む)	4.7%	0.21	0.00	1.00	6.4%	0.24	0.00	1.00
経営者・役員	1.2%	0.11	0.00	1.00	2.5%	0.15	0.00	1.00
学生・無職	30.3%	0.46	0.00	1.00	0.6%	0.08	0.00	1.00

本人年収	3.69	2.53	0.00	7.21	6.09	0.65	0.00	7.21
本人年齢	34.58	6.38	17.00	50.00	35.47	6.09	15.00	50.00
本人の時間外労働								
残業はほとんど 0 時間	32.3%	0.47	0.00	1.00	12.1%	0.33	0.00	1.00
週に 10 時間以内	26.4%	0.44	0.00	1.00	31.7%	0.47	0.00	1.00
週に 20 時間以内	6.0%	0.24	0.00	1.00	25.4%	0.44	0.00	1.00
週に 20 時間を超えていた	5.0%	0.22	0.00	1.00	30.1%	0.46	0.00	1.00
非該当 (学生・無業)	30.3%	0.46	0.00	1.00	0.6%	0.08	0.00	1.00
配偶者の雇用形態								
正社員・正規職員	83.5%	0.37	0.00	1.00	36.9%	0.48	0.00	1.00
パート・アルバイト	2.0%	0.14	0.00	1.00	28.9%	0.45	0.00	1.00
派遣・契約・嘱託社員	2.3%	0.15	0.00	1.00	5.8%	0.23	0.00	1.00
自営業 (家族従業者含む)	6.7%	0.25	0.00	1.00	3.3%	0.18	0.00	1.00
経営者・役員	4.2%	0.20	0.00	1.00	0.6%	0.08	0.00	1.00
学生・無職	1.4%	0.12	0.00	1.00	24.5%	0.43	0.00	1.00
配偶者の年収	6.04	0.78	0.00	7.21	3.95	2.35	0.00	7.21
最も若い子どもの年齢								
子どもなし	22.3%	0.42	0.00	1.00	24.1%	0.43	0.00	1.00
0-5 歳	50.2%	0.50	0.00	1.00	49.4%	0.50	0.00	1.00
6-12 歳	20.0%	0.40	0.00	1.00	19.9%	0.40	0.00	1.00
13 歳以上	7.5%	0.26	0.00	1.00	6.6%	0.25	0.00	1.00
Number of clusters		1,173				990		
Number of observations		15,873				13,029		

4.2 固定効果モデルの分析結果

女性の固定効果モデルにおけるモデル 1, 2, 3 では、性交渉を行っている場合と比較して、幸福度が有意に上昇した (表 2)。モデル 2, 3 では、家事負担割合については、自分が 9 割おこなっている場合と比較して、有意な係数はなかった。しかし、モデル 4 では、家事負担割合の主効果は、自分が 9 割おこなっている場合と比較して、4-6 割ずつ、配偶者が 7 割おこなっていると、有意に幸福度に正の効果があった。モデル 4 では、家事負担割合と性交渉の頻度との交互作用において、配偶者が 4-6 割負担しているかつ性交渉をしている場合と、配偶者が 7 割負担しているかつ月一回の性交渉をしている場合、基準カテゴリである自分が 9 割家事負担をしているかつ性交渉をしている場合に比べ、幸福度に有意な負の交互作用があった。したがって、女性の場合、家事をしていなかった時期に性交渉を行っていたら、配偶者が家事を半分程度おこなっている時期とくらべて幸福度は下がらないといえる。つまり、仮説 1 が支持される。

男性の固定効果モデルにおけるモデル 1, 3 では、性交渉を行っている場合と比較して、幸福度が有意に上昇した (表 3)。しかし、モデル 4 では、家事負担と性交渉の頻度の主効果と交互作用ともに幸福度に対して有意な係数はなかった。また、モデル 2, 3, 4 において、家事負担割合に有意な違いはなかった。したがって、仮説 1 も 2 も支持されない。

表 2 固定効果モデルの分析結果 (女性)

	女性			
	Model1	Model2	Model3	Model4
性交渉の頻度 (基準: まったくなし)				
月一回より少なかった	0.117 *** (0.033)		0.116 *** (0.033)	0.151 *** (0.045)

月に一回以上	0.191 *** (0.036)		0.190 *** (0.036)	0.230 *** (0.048)
週に一回以上	0.282 *** (0.046)		0.281 *** (0.046)	0.325 *** (0.057)
家事負担（基準：自分が9割）				
自分が7割		0.083 † (0.046)	0.078 † (0.046)	0.105 (0.079)
4～6割ずつ		0.078 (0.059)	0.065 (0.059)	0.276 ** (0.093)
配偶者が7割		0.095 (0.121)	0.098 (0.122)	0.270 * (0.119)
配偶者が9割以上		0.163 (0.155)	0.192 (0.157)	0.129 (0.240)
性交渉の頻度×家事負担				
月一回より少なかった×自分が7割				-0.038 (0.075)
月一回より少なかった×4～6割ずつ				-0.222 * (0.087)
月一回より少なかった×配偶者が7割				-0.080 (0.123)
月一回より少なかった×配偶者が9割以上				0.000 (0.000)
月に一回以上×自分が7割				-0.034 (0.075)
月に一回以上×4～6割ずつ				-0.236 ** (0.076)
月に一回以上×配偶者が7割				-0.431 * (0.203)
月に一回以上×配偶者が9割以上				-0.136 (0.464)
週に一回以上×自分が7割				-0.027 (0.086)
週に一回以上×4～6割ずつ				-0.297 ** (0.092)
週に一回以上×配偶者が7割				-0.284 † (0.169)
週に一回以上×配偶者が9割以上				0.555 (0.441)
R-squared	0.752	0.748	0.752	0.754
Adj. R-squared	0.732	0.728	0.732	0.733
Within R-sq.	0.070	0.057	0.072	0.076
Number of obs.	15,854	15,854	15,854	15,854

† < 0.1, * < 0.05, ** < 0.01, *** < 0.001. クラスターロバスト標準誤差を使用

表3 固定効果モデルの分析結果（男性）

	男性			
	Model1	Model2	Model3	Model4
性交渉の頻度（基準：まったくなし）				
月一回より少なかった	0.103 ** (0.036)		0.099 ** (0.036)	0.582 † (0.297)
月に一回以上	0.186 *** (0.037)		0.175 *** (0.036)	0.540 † (0.311)
週に一回以上	0.210 *** (0.042)		0.200 *** (0.041)	0.709 † (0.419)
家事負担（基準：自分が9割）				
自分が7割		0.008 (0.268)	0.004 (0.255)	0.423 (0.419)
4～6割ずつ		0.323 (0.227)	0.292 (0.213)	0.538 (0.377)
配偶者が7割		0.406 † (0.233)	0.365 † (0.218)	0.679 † (0.385)
配偶者が9割以上		0.365 (0.242)	0.333 (0.227)	0.704 † (0.388)
性交渉の頻度×家事負担				
月一回より少なかった×自分が7割				-0.524

				(0.331)
月一回より少なかった×4～6割ずつ				-0.406
				(0.298)
月一回より少なかった×配偶者が7割				-0.507 †
				(0.303)
月一回より少なかった×配偶者が9割以上				-0.510 †
				(0.303)
月に一回以上×自分が7割				-0.517
				(0.331)
月に一回以上×4～6割ずつ				-0.259
				(0.311)
月に一回以上×配偶者が7割				-0.347
				(0.315)
月に一回以上×配偶者が9割以上				-0.436
				(0.314)
週に一回以上×自分が7割				-0.801 †
				(0.473)
週に一回以上×4～6割ずつ				-0.410
				(0.417)
週に一回以上×配偶者が7割				-0.490
				(0.421)
週に一回以上×配偶者が9割以上				-0.583
				(0.417)
R-squared	0.783	0.782	0.785	0.786
Adj. R-squared	0.765	0.763	0.767	0.768
Within R-sq.	0.072	0.066	0.080	0.086
Number of obs.	12,955	12,955	12,955	12,955

† < 0.1, * < 0.05, ** < 0.01, *** < 0.001. クラスターロバスト標準誤差を使用

4.3 Double-Demeaned 固定効果モデルの結果 (頑健性の確認)

頑健性の確認として、Double-Demeaned 固定効果モデルを実施したが、これまでの分析と同じように、幸福度に及ぼす影響について、家事負担と性交渉との間には、相補関係があることが示された (表 4)。通常の固定効果モデルと Double-Demeaned 固定効果モデルを比較したところ、ほとんど同じ結果が得られた。また、Giesselmann and Schmidt-Catran (2022) にならい、通常の固定効果モデルと Double-Demeaned 固定効果モデルに違いがあるのかハウスマン検定 (Hausman 1978) を行った。結果として、女性においては、 χ^2 値が 0 未満になり適用できないことが示され、男性については、 $p=1.00$ であり、有意な違いはなかった。したがって、本研究においては、通常の固定効果モデルと Double-Demeaned 固定効果モデルにて得られた結果には有意な違いがないことが明らかとなった。⁵

表 4 固定効果モデルと Double-Demeaned 固定効果モデルの結果

	女性		男性	
	固定効果	Double Demeaning	固定効果	Double Demeaning
性交渉の頻度	0.003 *** (0.0003)	0.003 *** (0.0003)	0.002 *** (0.0003)	0.002 *** (0.0003)

⁵ なお、家事負担割合を量的変数にして、再度、女性について分析を行ったところ、Double-Demeaned 固定効果モデルにおける交互作用項は有意ではなかった。しかし、ハウスマン検定は、($\chi^2 < 0$)であったため、適用できないことが示された。したがって、本研究の結果に大きな違いはないと判断できる。

相手の家事負担が5割以上か	0.105 *** (0.020)	0.112 *** (0.020)	0.398 *** (0.035)	0.399 *** (0.035)
性交渉×家事負担	-0.003 *** (0.001)	-0.004 ** (0.002)	-0.001 (0.001)	-0.001 (0.002)
Number of obs.	15,876	15,876	13,032	13,032
ハウスマン検定	(χ ² < 0)		p=1.00	

† < 0.1, * < 0.05, ** < 0.01, *** < 0.001. クラスタースタandard誤差を使用

5 議論

表5 仮説の検証結果

仮説	分析結果	検証結果
H1: 男性の家事負担が少ない方が、性交渉による幸福度への影響が増加する(相補効果, 性別役割分業).	女性のケースでは, 本人が家事負担9割であることに比べ, 家事負担半分だと, 性交渉には負の効果がある.	<u>女性のみ支持</u>
H2: 家事負担が同じくらいだと性交渉による幸福度への影響が増加する(相乗効果, 完全平等主義).	性交渉と家事負担が半分程度の交互作用には, 正の効果はなかった.	支持されなかった.

女性男性ともに, 性交渉がまったくないよりもあったほうが, 幸福度が増加する. しかし, 女性の場合, 家事の負担割合との交互作用項を考慮すると, 家事負担が半分程度かつ性交渉を行っているという交互作用項は, 基準カテゴリである9割自分が家事を負担し同程度の性交渉の頻度があるものに比べ, 負の効果をもつ. さらに, Double-Demeaned 固定効果モデルでも, 変数に若干の操作化を加えたものの, 女性において, メインの固定効果モデルの分析と同じ結果が得られた. また, 家事負担については, 性交渉との交互作用を考慮しない場合, ほとんど影響はなかった.

結果を踏まえると, 性交渉の頻度が多いと幸福度が増す効果は, 家事分担が平等な時期では弱くなるといえる. 女性の家事負担割合が多い時期には, 性交渉をおこなうことが幸福度に影響するけれども, 家事負担が均等な時期には, 性交渉を行うことの効果は薄れる. したがって, 家事の負担と性交渉には相乗効果があるのではなく, 相補関係にあることが示唆される. したがって, 仮説の検証結果としては, 女性において, 仮説1が支持される(表5).

性別役割規範によって, 男女の役割がことなる日本社会においては, 男性が働き, 女性が家で家事を行うという家事負担のアンバランス差による不協和を性交渉が補う. あるいは, 性別役割分業によるアンバランス差によって, 夫婦の親密さ, 性的魅力が増し, 性交渉が幸福度に及ぼす影響が増え, 性交渉をしていない, かつ家事負担を平等に行っている時期と同程度の幸福度になったのかもしれない. この研究は, 1990年代前半の米国のデータを Kornrich et al. (2013)の知見と整合性があるといえる. しかし, 家事負担の割合が夫婦で平等

であることが性交渉の頻度、性的満足度を上昇させる知見を得た後続の研究 (Carlson et al. 2016) では、より新しい米国のデータを使用している。このことを踏まえると、日本の性役割規範がひと昔まえの米国と同じレベルであるがゆえに、このような結果になったのかもしれない。今後、男女の性役割規範が薄れ、平等の価値規範が強くなっていけば、そうした夫婦における性交渉と家事割合の関連が幸福度に及ぼす影響は、相補関係ではなく、相乗効果になるかもしれない。

性交渉が幸福度に及ぼす影響は先行研究 (Blanchflower & Oswald 2004; Kahneman et al. 2004; Wadsworth 2013; Elliott & Umberson 2008) と一致していたが、家事負担割合が幸福度に及ぼす影響は、多くの先行研究と一致していない結果もあった。性交渉が幸福度に及ぼす影響については、固定効果モデルを用いていない先行研究と同じように、性交渉をしていないよりもしていたほうが幸福度を上昇させる。一方で、家事負担割合については、家事負担割合の違いによって、幸福度は変化しない。これは個人間に着目してきた多くの先行研究 (Johnson et al. 2016; Carlson et al. 2016; Barrett & Raphael 2017; Harris et al. 2022) の結果とは異なる。ただし、固定効果モデルをもちいて、家事負担割合が性交渉の頻度に関連がないことを発見した Hajek (2019) の研究とは整合性があるかもしれない。このような先行研究との不一致がみられたのは、コンテキストの違い、あるいは、多くの先行研究では、固定効果モデルを用いていないため、観察されていない異質性によって効果があるように見えていたからかもしれない。

本研究の限界として、調査対象者のパートナーの情報がないことが挙げられる。いくつかの先行研究 (e.g., Johnson et al. 2016) では、調査対象者のパートナーの情報ももちいて、家事負担割合が性的満足度や性交渉の頻度に関連するかを検証している。しかし、本研究の用いたデータでは、調査対象者のパートナーの情報がないため、それらの研究と厳密には、比較ができないかもしれない。たとえば、それぞれの夫婦ごとに、あるいは、夫婦の継続期間によって、性役割規範が変化するかもしれない。このことが、パートナーがどれほど家事負担をしてくれるかを期待する、あるいは、パートナーから期待されることが変化しうるかもしれない。そして、その期待と役割負担が合致するかによって、幸福度や満足度への影響や、性交渉との関連による幸福度への影響が変化しうる可能性がある。今後の課題として、調査対象者のパートナーの情報も考慮した研究を行うことが望まれる。

本研究の貢献としては、性交渉と家事負担の割合の関連によって、幸福度が変化しうることを発見したことと、これら 2 つを固定効果モデルにて検討したことである。本研究の結果をふまえると、家事負担と性交渉が幸福度に及ぼす影響は、どちらか一方を考慮するのではなく、これら両方との関係をも考慮して夫婦関係に着目することが重要だといえる。このことは、本研究の知見は、調査対象である日本と同じ価値規範をもち、家事負担の割合がアンバランスな社会で適用できるかもしれない。しかし一方で、この知見は、日本特有のものである可能性もある。今後の研究として、日本と同じ、あるいは、異なる価値規範を持つ様々な国を対象として、性交渉と家事負担の割合の関連によって、幸福度が変化

しうるかを研究することが望まれる。

参考文献

- Amato, P. R., Johnson, D. R., Booth, A., & Rogers, S. J. (2003). Continuity and change in marital quality between 1980 and 2000. *Journal of Marriage and Family*, 65(1), 1-22.
- Argyle, M., & Furnham, A. (1983). Sources of Satisfaction and Conflict in Long-Term Relationships. *Journal of Marriage and Family*, 45(3), 481-493.
- Barrett, A. E., & Raphael, A. (2018). Housework and sex in midlife marriages: An examination of three perspectives on the association. *Social Forces*, 96(3), 1325-1350.
- Batalova, J. A., & Cohen, P. N. (2002). Premarital Cohabitation and Housework: Couples in Cross-National Perspective. *Journal of Marriage and Family*, 64(3), 743-755. <http://www.jstor.org/stable/3599939>
- Becker, G. S. (1991). A treatise on the family: Enlarged edition. Harvard University Press.
- Blanchflower, D. G., & Oswald, A. J. (2004). Money, Sex, and Happiness: An Empirical Study. *The Scandinavian Journal of Economics*, 106(3), 393-415. doi: 10.1111/j.1467-9442.2004.00369.x
- Carlson, D. L., Miller, A. J., Sassler, S., & Hanson, S. (2016). The Gendered Division of Housework and Couples' Sexual Relationships: A Reexamination. *Family Relations*, 78, 975-995. <https://doi.org/10.1111/jomf.12313>
- Durex. (2005). Give and Receive 2005 Global Sex Survey Results.
- Elliott, S., & Umberson, D. (2008). The performance of desire: Gender and sexual negotiation in long-term marriages. *Journal of Marriage and Family*, 70(2), 391-406. <https://doi.org/10.1111/j.1741-3737.2008.00489.x>
- Giesselmann, M., & Schmidt-Catran, A. W. (2022). Interactions in Fixed Effects Regression Models. *Sociological Methods & Research*, 51(3), 1100-1127. <https://doi.org/10.1177/0049124120914934>
- Grover, S., & Helliwell, J. F. (2019). How's Life at Home? New Evidence on Marriage and the Set Point for Happiness. *Journal of Happiness Studies*, 20, 373-390.
- Hajek, K. (2019). Sex and housework: Does perceived fairness of the distribution of housework actually matter? *Journal of Family Research*, 31(1), 83-104. <https://doi.org/10.3224/zff.v31i1.05>
- Harris, E. A., Gormezano, A. M., & van Anders, S. M. (2022). Gender Inequities in Household Labor Predict Lower Sexual Desire in Women Partnered with Men. *Archives of Sexual Behavior*, 51(8), 3847-3870. <https://doi.org/10.1007/s10508-022-02397-2>
- Hausman, J. A. (1978). Specification tests in econometrics. *Econometrica: Journal of the Eco*

nometric Society, 1251-1271.

- Helliwell, J. F., Layard, R., Sachs, J., De Neve, J.-E., Aknin, L., & Wang, S. (Eds.). (2021). *World Happiness Report 2021*. New York: Sustainable Development Solutions Network.
- International Labour Organization. (2023). ILO Modelled Estimates and Projections database (ILOEST). ILOSTAT. Retrieved September 5, 2023, from <https://ilostat.ilo.org/data>
- Ishibashi, A. (2021). Factors Influencing Sexual Satisfaction in Men and Women: A Study in Japan. *The Senshu Social Well-being Review*, 8, 43-54. <https://doi.org/10.34360/00012565>
- Johnson, M. D., Galambos, N. L., & Anderson, J. R. (2016). Skip the dishes? Not so fast! Sex and housework revisited. *Journal of Family Psychology*, 30(2), 203–213. <https://doi.org/10.1037/fam0000161>
- Kahneman, D., Krueger, A. B., Schkade, D., Schwarz, N., & Stone, A. (2004). Toward National Well-Being Accounts. *American Economic Review*, 94(2), 429-434. <https://doi.org/10.1257/0002828041301713>
- Kohara, M. (2007). Is the full-time housewife a symbol of a wealthy family? *Japanese Economy*, 34(4), 25-56.
- Kornrich, S., Brines, J., & Leupp, K. (2013). Egalitarianism, Housework, and Sexual Frequency in Marriage. *American Sociological Review*, 78(1), 26–50. <https://doi.org/10.1177/003122412472340>
- Laumann, E. O., Paik, A., Glasser, D. B., Kang, J. H., Wang, T., Levinson, B., Moreira, E. D., Jr., Nicolosi, A., & Gelling, C. (2006). A cross-national study of subjective sexual well-being among older women and men: Findings from the Global Study of Sexual Attitudes and Behaviors. *Archives of Sexual Behavior*, 35(2), 145-161. <https://doi.org/10.1007/s10508-005-9005-3>
- 佐藤一磨. (2020). 夫婦の家事・育児分担と妻の幸福度の関係—夫婦でどのように家事・育児を分担すると妻が最も幸せとなるのか [The Relationship Between the Division of Household and Childcare Duties Among Couples and Wife's Happiness: How Does Household and Childcare Division Impact Wife's Happiness?]. *Panel Data Research Center, Keio University PDRC Discussion Paper Series*, DP2020-004. <https://www.pdrc.keio.ac.jp/publications/dp/6699/>
- Sechiyama, K. (2013). *Patriarchy in East Asia: A Comparative Sociology of Gender (The Intimate and the Public in Asian and Global Perspectives)*. Leiden, Netherlands: Brill.
- Shelton, B. A., & John, D. (1996). The division of household labor. *Annual Review of Sociology*, 22, 299-322.
- Stack, S., & Eshleman, J. R. (1998). Marital Status and Happiness: A 17-Nation Study. *Jour*

- nal of Marriage and Family*, 60(2), 527-536.
- Stevens, D. P., Kiger, G., & Mannon, S. E. (2005). Domestic labor and marital satisfaction: How much or how satisfied? *Marriage & Family Review*, 37(4), 49-67.
- Tsuya, N. O., Bumpass, L. L., Choe, M. K., & Rindfuss, R. R. (2005). Is the gender division of labor changing in Japan? *Asian Population Studies*, 1(1), 47-67.
- Raymo, J. M., Park, H., Xie, Y., & Yeung, W. J. (2015). Marriage and Family in East Asia: Continuity and Change. *Annual Review of Sociology*, 41, 471-492. <https://doi.org/10.1146/annurev-soc-073014-112428>
- Wadsworth, T. (2013). Sex and the Pursuit of Happiness: How Other People's Sex Lives Are Related to Our Sense of Well-Being. *Social Indicators Research*, 116(1), 115-135. doi: 10.1007/s11205-013-0267-1
- Waite, L. J., & Joyner, K. (2001). Emotional Satisfaction and Physical Pleasure in Sexual Unions: Time Horizon, Sexual Behavior, and Sexual Exclusivity. *Journal of Marriage and Family*, 63, 247-264. <https://doi.org/10.1111/j.1741-3737.2001.00247.x>
- Yabiku, S. T., & Gager, C. T. (2009). Sexual Frequency and the Stability of Marital and Cohabiting Unions. *Journal of Marriage and Family*, 71, 983-1000. <https://doi.org/10.1111/j.1741-3737.2009.00648.x>
- Yamamura, E. (2014). Smokers' Sexual Behavior and Their Satisfaction with Family Life. *Social Indicators Research*, 118(3), 1229-1247. <https://doi.org/10.1007/s11205-013-0466-9>